

「ヤクシヨク」

中村 龍介

会社に勤めていた頃、ビルの二十階に二つの食堂があった。従業員食堂と役員食堂。役員食堂は「ヤクシヨク」と呼ばれ、皆から敬遠されていた。

ところが、思いがけなく私は五十代の半ばで役員に昇格し、役食でお昼を食べる羽目になった。最初の食事は七月初めの月曜日。その日のことは今も鮮明に覚えている。

遠慮と気恥ずかしさで十分ほど遅れて役食のドアを開ける。役員諸侯の視線が一斉にこちらを向く。私は慌てて隅の方に空いた席を探すが見当たらない。唯一つ膳の置かれた空席が中央にあるが、そこはN会長のトイ面。

恐る恐る腰を屈めるようにその席に近づき、「失礼します」と声をかけて腰を下ろす。

会長は「おう」と言ったのかどうか、口が僅かに開いた。声は殆ど聞こえない。

N会長は社外にまで知られるほどの無口な御仁で、「積極的寡黙」との仇名がある。私は黙って食べ始める。末席の辺りでは週末のゴルフ談義が賑やか。笑い声すら聞こえるのに、こちらでは不気味な沈黙が続く。まるでお通夜の夕食。

何とか雰囲気盛り上げなければいけない。適当な話題を頭の中で模索する。しかし、社のトップの会長と新米の平取との格差は歴然としていて、その場に相応しいテーマを思いつかない。

「暑くなりましたね」

沈黙に耐え切れず、私は遂に口火を切った。

会長は、一瞬箸をとめて私の方を見るが、何も言わない。「昨日、ネコの額ほどの庭で草取りをして、汗ビツシヨリになりました」

中身の無い話題に自分でも内心焦りを感じながら、最近の猛暑の事例を思いつくままに話した。

黙って聴いていた会長は漸くポツリと一言。

「それが、どうした」

会長の左隣の席からT専務が気の毒そうにこちらを見る。
「何も喋らなくていいんだよ。気にせず食べればいい」
その眼が語っていた。

二日目から私は少し早めに昼食に行くことにした。末席に場所を確保して、同世代の役員と心置きなく語り合いながら食べる。楽しいランチタイムに変わった。

ところが、ある日仕事の都合で遅れて役食に入ってみると、初日同様、空席はN会長の前だけ。しかも横にはT専務。

「失礼します」と、席に着く。

この日のメニューはカレイの姿煮。私は黙々と箸を動かす。N会長は寡黙な上に食事は超スロー。食べ終えて席を立つ者もいる。下手をすると会長と二人だけになってしまう。私は早食いに転じた。が、悲しいかな、箸の使い方が不器用で、魚の身が骨から上手く離れない。やむなく指で頭を押さえて、箸の側面で身を剥ぎ落とす。反動で煮汁が跳びはねる。

何とか食べ終えたものの、皿の上はネコが喰い散らかしたような有様。会長はと見ると、食事を済ませ爪楊枝を片手にお茶をすすっている。前には、頭と骨だけになったカレイが、昔、学校の理科室で見た標本さながら、どうぞ御覧下さいと言わんばかりに横たわっている。

私が皿を見較べるのを咎めるように、会長がこの日最初で最後の言葉を放った。

「キミは、魚を食べるのが下手だな」

助けを求めて隣のT専務に目をやると、皿には半分残ったカレイの切り身が乱雑に放り出されていた。

「専務もあまりお上手ではないようですね」

苦し紛れに発した私の言葉に、T専務はニヤリと笑ったが何も言わなかった。

帰りのエレベーターの中で、乗り合わせたT専務は私の傍に近寄ると、関西弁訛りで耳元に囁いた。

「キミ、さつきはオレに振ったやろ。けど、あれは冷凍鰈や。あんな不味いもん全部食うヤツの気が知れんわ」

(了)